

# 障がいを理解するための「絵本」制作の試み (第2報)

— 「障がい理解」の実践と本質 —

平林 あゆ子

## Making a Picture Book to Promote Understanding of Children with Disabilities (II) :

### “Understanding Disabilities” its Practice and Essence

Ayuko HIRABAYASHI

#### 1. はじめに (問題と目的)

教育界では特別支援教育の取り組みが2007年4月より開始され、インクルージョン (障がい<sup>注1</sup>の有無で区別するのではなく、個々必要に応じた教育支援が受けられる制度) が進みつつある。保育所、幼稚園、地域の学童クラブ等においても、「共に生きる」というインクルーシブ保育の理念や保育行政の障害児加配 (障がい児の人数により保育士を園にプラス配置) 等の施策とも相まって、障がいをもつ子どもと健常児との接点が増加しつつある。こうした状況において、障がい児と健常児相互の理解の工夫が切に求められている。そこで、インクルーシブ保育の促しとして、主として絵本により、「障がい」の理解を推進できないかと考えた。絵本は、大人にとっても子どもにとっても身近で親しみやすく、ともすると難しく重いテーマとなりがちな「障がい」についてやさしく、分かりやすい方法と思われるからである。子どもたち相互の理解を促すために、「障がいを理解するための絵本」(以下「絵本」と記す)の制作を、幼児教育を志望する学生、現役の幼児教育者、障がい児の保護者らと共に試みた。

「絵本」の制作の目的は、(1)「絵本」の制作過程をとおして将来、幼児教育を担う学生は、「障がい」の理解の深化と人間理解の深化を目指すこと、(2)制作した「絵本」をとおして子どもたちの「障がい」の理解の促しを図り、インクルーシブ保育・教育を図ることにある。

本稿では、幼児教育を担う学生に対し、主に「絵本」を通して「障がい」の理解の深化と人間理解の深化を目指した「障がい」の理解の基本概念的仮説を考案し図式化した。そして、筆者の「障がいの理解の基本概念的仮説」に則り「障がい」を理解するための教育の実践過程を検討し考察したので報告する。

#### 2. 「障がい」理解教育・保育の必要性

##### (1) 障がい理解教育の理念を支える2000年代の法的経過

注1 「障害」の害の字の表記は、当用漢字、常用漢字の制定により、もともと使用されていた「碍」(さまたげの意)が「害」に使用限定され、現在に至っていると考えられる。「害」は悪くする、わざわざなどの意味があり人により否定的印象を受けやすいため、各自治体ではバリアフリーの一環として「障がい」と表記を変更する取り組みが増加しつつある。害の字の表記は、議論のあるところではあるが、ことばにはものの捉え方、視点を表す面もあると考えれば、より良い表現として法令用語等を除き、「障がい」と記すことにした。

世界保健機関 (WHO) は、「WHO国際障害分類 (ICIDH, 1980)」を2001年5月に改訂し、人間の生活機能と障害の分類法として国際生活機能分類 (ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health) を採択した。この特徴は、これまでのWHO国際障害分類 (ICIDH) が「社会的不利を分類する」という考え方が中心であったのに対し、国際生活機能分類 (ICF) は、「環境因子」という観点を加え、例えば環境を整えバリアフリーにすることにより障害が軽減するなどの評価ができるように構成されている。こうした理念を受け、地方公共団体等において、街のバリアフリーの構築整備を推進する計画が進められてきた。

また、2004年6月に障害者基本法の改正により、その中に「国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによってその相互理解を促進しなければならない(第14条3項)」という条項が加えられた。そして2006年6月に「学校教育法等の一部を改正する法律案」の可決、公布を経て、2007年4月から、特別支援教育「支援を必要としている子 (children with special needs)」が、どのように年齢とともに成長、発達していくか、その全てにわたり、本人の主体性を尊重しつつ、できる援助のかたちとは何か考えていこうとする取り組み<sup>1</sup>が、実施されることになった。

この法的経過の中で幼児教育・保育において「障がい」と「障がいのある子ども」の理解にどのように取り組むかが問われているのである。そして幼児教育の現場において、幼児教育者自らが障がいについて十分理解し、支援していくことができる力量が問われているのである。

## (2) 幼児教育を担う学生の「障がい」理解の深化の必要性

### ① 「障がい理解」

障害のある子どもについての理解は、「まず障害児を取り巻く大人の理解が重要課題である」<sup>1</sup>。単に子どもたちが共に在り関わるだけではなく、「そこに偏見を取り除き理解を促す方策が重要 (J. Donaldson, 1980<sup>2</sup>; 山本・桐原・徳田, 1997)<sup>3</sup>」である。それが子どもたちの障がい児への姿勢に大きな影響力をもつと思われる。まして将来、幼児教育・保育を担う学生の「障がい」理解の教育は、大きな影響力をもつのは言うまでもない。そして「障がい理解」は、人間理解に繋がっており、人間理解の教育がベースとなると考える。

### ② 方法

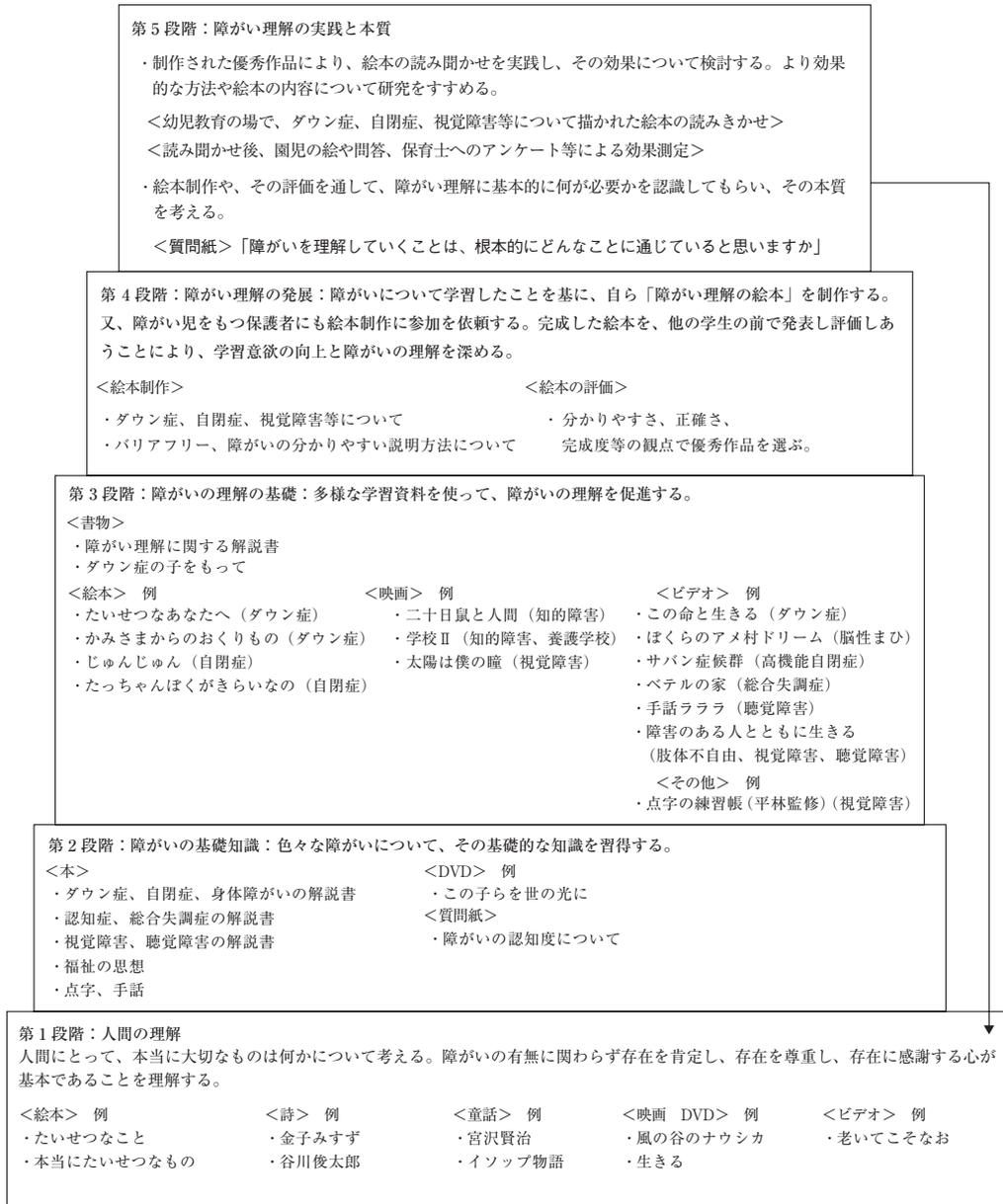
学生への主に「絵本」による障がい理解の指導過程の例示と共に、表1「絵本による障がい理解の基本概念」を考案し、図式化した。表1は、障がい理解の深度の構造であり、①人間の理解から⑤障がい理解の実践と本質を把握するに至るまで、①の段階を基礎として土台を構築して次の段階に進み、各段階を踏まえながら⑤の段階まで進むことを示している。また、⑤の段階まで進むと再び、①の段階に回帰しつつ、構造的にはより高い質に徐々に上昇していくと考える。したがって直線的には段階は進まず、螺旋構造に進むと考える。

## 3. 「障がい」理解の深化と人間理解の深化

### (1) 「絵本」による障がい理解の基本概念

「障がい理解」について、徳田 (2005: 2-3) は「障がいのある人に関わるすべての事象を内容としている人権思想、特にノーマライゼーションの思想を基軸に据えた考え方であり、障害に関する科学的認識の集大成である」と定義づけている。また、「障がい理解」の深化は、ひいては人間を評価する「ものさし」の多様化につながり、すべての人間の価値がお互いによって

図表1 「絵本」による障がい理解の基本概念（平林，2007）



認められることになる」<sup>4</sup>と述べている。

筆者は、絵本による「障がい」理解の基本概念について次のような概念図を仮説として考えた。「障がい理解」の第1段階はまず「人間の理解」：「障がい」の有無に関わらず、ヒトという存在を肯定し、存在を尊重し、存在に感謝する心が基本である。障がい理解は、人間性を高めて人間関係に配慮したり、広い視野で考えていくことにつながっており、人間という存在に対する深い理解に導かれる性質のものと考えられる。第2段階は「障がい」の基礎知識：「障がい」

のいろいろな基礎知識を習得することである。第3段階は「障がい理解の基礎」：多様な学習資料を使用し「障がい理解」を促進することである。第4段階は「障がい理解の発展」：障がいについて学習したことを基に、自ら「障がい理解の絵本」を制作する。第5段階は「障がい理解の実践と本質」：制作された優秀作品により、絵本の読み聞かせを実践し、その効果について検討し、より効果的な方法や内容について研究を進める。さらに、絵本制作やその評価をとおして「障がい理解」に基本的に何が必要かを認識してもらい、その本質を考える。障がい理解は、「人間の理解」に通じているというよりも「基本的に人間に対する深い理解があって始めて真に障がい理解が可能である」という本質に回帰するものと考ええる。そして直線的には段階は進まず、螺旋構造に進み、再び第1段階に回帰し学習が進むと全体の位置としては、相対的に上昇していくと考える。

## (2) 「障がい」理解の発達段階について

「障がい理解」について、徳田（2005：8-9）<sup>5</sup>は「障がい理解」にはレベルがあり「完全参加と平等」、すなわち共生の考え方にどの程度達しているかにより「障がい」理解をレベル化し、その発達段階を第1段階から第5段階を想定している。筆者の障がい理解の対象は幼児であることから、0段階を付加し改編したものが、図表2「障害理解の発達段階」である。

図表2 障害理解の発達段階 徳田（2005）を改編

発達の段階	障害理解の程度	「絵本」の導入
0	認識しない段階	
1	気づきの段階 障害のある人がこの世の中に存在していることを気づく	↓
2	知識化の段階 自分と障害児・者の差異が持つ意味を知る ----- 情緒的理解の段階（知識化の段階と並列） 直接的間接的な接触を通して障害者のdisability, handicapを心で感じる	
3	態度形成段階 適切な認識の形成と適正な態度ができる	
4	受容的行動の段階 生活場面での受容、援助行動の発現	

0段階は、「障がい」のある人が存在することに気づいていない段階で、人間関係も狭い範囲にある段階である。以下第1段階から第4段階までは徳田（2005：9）を引用し、図式化を試みた。この記載については、徳田に許可を得た。徳田（2005：9）の第2段階から第3段階は同レベルとして整理したので、段階の呼称は徳田（2005：9）のものとは違っている。第1段階：気づきの段階は「障害のある人がこの世の中に存在していることを気づく段階」、第2段階は知識化の段階：自分と障害児・者の差異が持つ意味を知る段階、あるいは：情緒的理解の段階（第

2段階の知識化の段階と並列される段階）障害児・者との直接的な接触や間接的な接触を通して障害者のdisability, handicapを心で感じる段階、第3段階は態度形成段階：十分な第2段階の学習と第3段階の体験を経た結果、適切な認識（体験的裏づけをもった知識、障害観）が形成され障害者に対する適正な態度ができる段階、第4段階は受容の行動の段階で、生活場面での受容、援助行動の発現の段階である。

徳田は、障がい理解教育とはこの第1段階から第4段階までを促進していく教育であるとしている。「絵本」の導入は「気づきの段階」、「知識化の段階」、「態度形成段階」に有効に働くと考える。

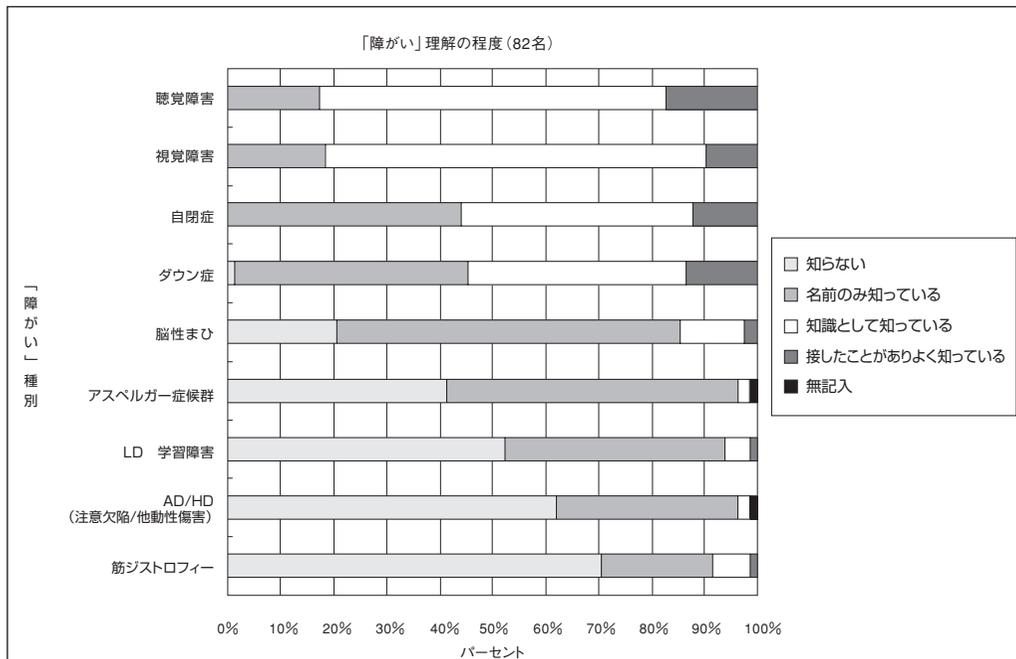
#### 4. 学生の「障がい理解」についての知識：実践教育を始める前に

インクルーシブ教育を可能にするための幼児教育は如何にあるべきか、幼児教育者に必要な「障がい」についての知識など、授業内容を検討するための基礎データを得るために、「障がい」について、質問紙による調査を継続して実施してきた。その結果を分析し、幼児教育者養成に必要な障害の知識や到達点について検討した。

##### (1) 「障がい」の認識度について

方法は、質問紙により「障がい」についての認識度を「接したことがあり、よく知っている/知識として知っている/名前のみ知っている/知らない」の4点選択で調査を実施した。「接したことがあり、よく知っている」障がいについては、接した場や時期についても記述を求めた。ここでは、2007年4月に幼児教育志望の名古屋市内のA短期大学1年生（女子）の「障がい」理解の程度を図表3で示した。

図表3 「障がい」理解の程度



①理解していない「障がい」

A短期大学1年生(女子)82名で、「名前のみ知っている・知らない」と応答した「理解していない障がい」は、「AD/HD(注意欠陥/多動性障害)、アスペルガー症候群、吃音、LD 学習障害、筋ジストロフィー、脳性まひ」の順に高い割合にある。これは、教育の場での接点や知識を得る場がほとんど得られなかったことを示しているであろう。

② 接したことがあり、よく知っている「障がい」

「接したことがありよく知っている障がい」は「聴覚障害」であり、接した場や時期は、手話クラブやサークルなどと回答しており、小、中、高の学校での活動から接する機会を得ている。また、ダウン症については保育園からの友達、小、中、高の学校でのボランティア活動で接した経験を挙げている。自閉症については、小学校、中学校の交流学級と高校でのボランティア活動が挙げられている。「視覚障害」は、小・中学校で盲学校が隣で接する機会のある環境や、高校での実習や点字クラブなどでの経験を挙げている。全体としては、「接したことがありよく知っている障がい」は、どの「障がい」も20%以下であり、「障がい」についての知識の乏しさを示している。

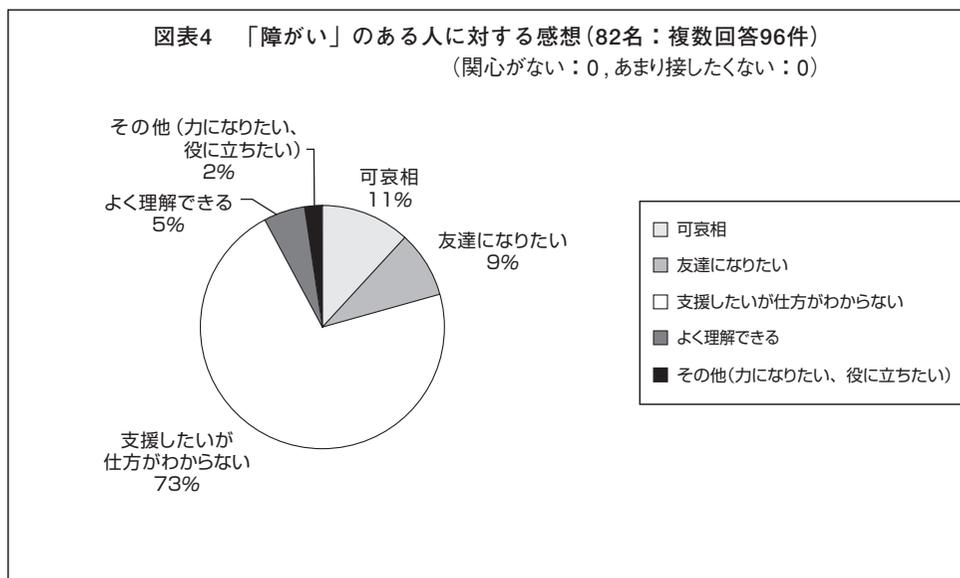
③ 知識として知っている「障がい」

「知識として知っている」という「障がい」の回答では、「自閉症、ダウン症」が他の「障がい」よりも、比較的高く出ている。これはテレビ番組などでの登場頻度の影響が伺われる。

(2)「障がい」のある人に対する感想

2007年4月に、幼児教育志望の名古屋市内のA短期大学1年生(女子82名)の「障がい」のある人に対する感想として7項目の感想に該当する割合を以下の図表4で、示した。目立った回答結果は、73%の学生が「支援したいが方法が分からない」と応答している事である。感想の項目で「1 関心がない」や「2 余り接したくない」は皆無であった。

感想の項目 1 関心がない 2 余り接したくない 3 可哀相 4 友達になりたい  
5 支援したいが仕方が分からない 6 よく理解できる 7 その他：具体的に



### (3)まとめ

以上の結果を踏まえながら、将来幼児教育にあたる学生の教育内容は配慮する必要がある。この調査からは、理解のない個々の「障がい」は、いわゆる「軽度発達障がい」と言われる障がい群〔AD/HD（注意欠陥/多動性障害）、アスペルガー症候群、LD（学習障害）〕と、吃音、筋ジストロフィー、脳性まひ、について理解されていない割合が高いといえる。しかし「接したことがあり、よく知っている障がい」の割合は、多くて20%未満の学生であり、ここに挙げた全ての「障がい」についても基礎的知識から教示する必要があることが分かる。また、「障がい」のある人に対する感想は、否定的な感想はなく、73%の学生が支援したいが方法が分からないと応答しており、支援の方法の知識提供も重要課題となっていることが分かる。

これらの調査により、図表1「絵本」による障がい理解の基本概念（平林，2007）の第2段階「障がいの基礎知識」の教授も以上に記した点を配慮しながら学生に提供する必要がある。

## 5. 絵本による「障がい」理解の基礎

### (1)実践教育「障がいとは何か」

まず、「障がい」を学生自身がどう捉えるかについての勉強のため、絵本「障がいて、なあに？——障がいのある人たちのゆかいなおはなし」<sup>6</sup>を紹介し、読みきかせを実施した。その後「障がい」を子どもたちにやさしく説明する方法について考えさせた。そして「障がい」のある人を子どもたちにどのように気づかせ、子どもたちにどう説明するかを文章化させた。学生は他の学生が発表の度に子どもの立場になり「しょうがいてなあに？」と発表者と問答形式で役割交代をし、子どもに理解できることばを考察させた。次に子どもに説明するための小さな「絵本」の制作を試み発表させ、子どもに理解できる「障がい」の概念について、説明方法の向上を図った。

### (2) 学生の子どもたちへの「障がい」の説明例

「障がい」の概念を子どもにどう説明すればよいかを、子どもと幼児教育者との役割交代をしながら発表させることにより、より洗練した説明例が出現してきた。このことは、学生自身の「障がい」の概念を整理し把握することに繋がったからであると考えられる。以下が説明例である。

1. 人の中には背が高い人、低い人、太っている人、目が悪い人がいるように、いろいろな人がいる。それと同じように、目が見えない人、車椅子に乗ってる人もたくさんいる。例えば車椅子に乗っている人は階段をあがるのは大変なこと。人が大変だと思った時、それが「障がい」なの。また、普通の人よりも、目が見えない人達は大変だと思うことが多いから、少し手伝ってあげてね。

2. 皆は目が見えるよね。お話もできるし音も聞くことができるね。思いっきり走ったり、手を広げて伸びをしたりだってできる。だけど、皆が当たり前でできることが仕方なく、うまくできない人達もいるの。でも私達と同じ人だし応援すれば生活もできるし何にも変わらないんだよ。

### (3)「しょうがいて なあに？」の小さな絵本制作

高い評価を得た学生の文章に筆者が大幅に加筆修正し、絵を加えたものを、ここに紹介しておく。

「しょうがいって なあに？」の例



6. 市販の障がい理解の絵本の紹介と読みきかせ

表1「絵本」による障がい理解の基本概念(平林, 2007)に則り、各段階の「絵本」の使用による教育内容を例示しながら述べる。ここでは幼児教育志望の名古屋市内のA短期大学1年生(女子41名)の質問紙による回答の結果を記す。

(1)第1段階 人間の理解

この段階に該当すると思われる絵本『たいせつなきみ』<sup>7</sup>を例に、学生への実践を述べる。

絵本「たいせつなきみ」のよみきかせと質問紙をとおして、人間の理解について考える機会を提供する。即ち、人間にとって、本当に大切なものは何かについて考え、存在を肯定し、存在を尊重し、存在に感謝する心を理解する。この絵本の中心的なメッセージは、「人は何もできなくとも、存在するだけで大切なこと」である。

『たいせつなきみ』の内容:木彫りの小人ウィミックスたちの村で、ウィミックスたちは毎日、一日中同じことをしていた。才能のある人や凄いことのできるウィミックスには、ピカピカのお星さまシールが与えられ、才能がないものや、特別のものを持っていないウィミックスには、灰色のだめ印を貼る、ということ。こんな評価を毎日しながら、ウィミックスたちは暮らしていた。才能もっている者や凄いことのできる者、または、頭のいい者は大切な存在として受け入れられる。この絵本では、お星さまシールが与えられるということを示される。しかし、残念ながらいくら、勉強しても物分りのよくない者や失敗ばかりしている者もある。これをこの世界では、だめな人間として評価される。この絵本の主人公「パンチネロ(木彫りの小人ウィミックス)」が、それとしてあげられている。特別の才能を持たない「だめ存在」の象徴である。パンチネロはパンチネロをつくったエリに出会った。エリのことば「外見や才能は関係なく、お前の存在自体がたいせつでいい」といにより、パンチネロはやっととても幸せな気持ちに包まれた。

## 絵本『たいせつなきみ』のよみきかせ後の質問紙による回答

### 1. 「シール」は何を象徴しているか。

・周りからのいい評判、周りからの批判 ・差別観 ・外見、その人がどうみているかを形にあらわしたもの ・他人の価値観 ・偏見（社会） ・その他 : 身分、世間体、世間の評価や印象、地位と名誉、ランク（順位）、優越感・劣等感、うわさ話・ウソの話・見た目、灰色のシールはいじめ

回答の理由：・周りから勝手に決められた評価 ・シールを貼って相手を差別する  
・国によって差別したり、いじめたりすることと同じだ  
・見た目判断して決め付けるから

### 2. エリは何を象徴しているか？

エリ：・親 ・神様、真実、愛、親の愛、無償の愛、自分を大切に思ってくれる人  
回答の理由：大切なものを気づかせてくれる。

### 3. この「絵本」は幼児教育に、どのように役立つと思いますか。

・一人一人みんないい所はあるし、大切だということが伝わると思う。  
・人より何かが出来るか出来ないかで、人格を否定したりすることは、いけないことが分かる。  
・「人それぞれ」について教えられる

### 4. この絵本についての感想

・人はどうしても周りの人と比べたり、人の意見に左右されてしまう。大切なことはそれをどう受けとめるかで、気にせず自分を大切に思ってくれる人の意見を聞くことも大切だと思えた。  
・ありのままの自分を受け入れてくれる人が一人でもいるということが大切だ。  
・シールを貼ってその人の価値を決めるのは、とてもひどいことで、いじめや差別につながってしまう。ひどい差別をされ続けると、自分は生きている価値はないなどという気持ちになる。その時に大切に思ってくれる人に出会えてよかった。  
・「いじめ」「差別」ということが子どもたちでも理解できると思った。  
・希望を失った人や一般の大人に読んでほしい。  
・外見で判断してしまうのが、今の時代ではいじめにつながっていく  
・中学時代にいじめられてから、他人からどう思われているか気にするようになった。しかし、他人にどう思われているかというより自分のことを大切だと思ってくれる人がいるということを感じるというのを思うといいと思えた。  
・シールに影響されることにより気持ちが沈む。そんな時、「シールに惑わされちゃダメ」という違う意見の人と出会えることが大切だと思った。  
・将来、いじめにあわないためにも、性格がゆがまないためにもぜひ読んであげたい絵本である。  
・落ち込んでいるときに前向きになれる。  
・シールがつけられないような自分を持った人になりたい。  
・オンリーワンの精神が良いと思う。

**考察：**学生は、シールの象徴しているものは、「外見からの勝手な評価」でいじめや差別に繋がるものと捉えている。だめシールを貼られてばかりのパンチネロを認めるエリの象徴は、「親、神様、愛、親の愛、無償の愛」と捉え、人間の土台となる点の気づきがみられる。この絵本を

とおして、幼児教育に何が基本かを認識させることができると思われる。この絵本の学生の感想にも述べられている「人より何かが出来るか出来ないかで、人格を否定したりすることは、いけないことが分かる」という認識に現れている。すなわち、障がいの有無で人を判断するのではなく、それぞれの人格を認めあうという「障がい理解」の土台として把握して欲しいことに至っている。

## (2) 第2段階 障がいの基礎知識

「障がいの基礎知識」については、4. の学生の「障がい」の認識度についての「まとめ」に記したように認識度の調査をし、学生のレベルにあった教授内容を配慮する必要がある。

## (3) 第3段階 障がいの理解の基礎：多様な学習資料を使って、障がいの理解を促進する。

例えば現業保育士と筆者により共に制作した絵本『たいせつなあなたへ』<sup>8</sup>を例にとろう。

これはダウン症をもつ保護者の気持ちが表現されていて、ダウン症という「障がい」の易しい説明が入っている。この絵本を学生に読みきかせた後、他の絵本の中の「障がい」の説明も例示しながら考えさせ、「絵本」を子どもたちへ導入する際に例えばダウン症という「障がい」をどのように説明し絵本のなかで表現するかについて考察させた。次は、『たいせつなあなたへ』が役に立つ点は何かを考えさせたA短期大学1年生(女子41名)の質問紙の複数回答である。

### 『たいせつなあなたへ』が役に立つ点(複数回答:56件)

- ① ダウン症(障がい)の理解:17件
- ② ダウン症の説明がわかりやすい:14件
- ③ ダウン症児(障がいの子ども)を持つ母親の理解:5件
- ④ 子どもの心になって考えられる(母親の愛情に包まれる):4件
- ⑤ 生まれてきたことの大切さを知る:3件
- ⑥ 同じ障がいを持つ母親が読むと共感できる:2件
- ⑦ 母親の考え方(気持ち)を見直せる:2件
- ⑧ 思いやりの気持ちを持たせることを促せる:1件
- ⑨ ダウン症の子どもに自分は大切だと伝えられる:1件
- ⑩ 早期発見の手がかりになる:1件
- ⑪ 子どもたちの笑顔には、人を笑顔にする力がある:1件
- ⑫ ダウン症児を持つ母親の支えになる:1件
- ⑬ 親と子の絆が感じられる:1件
- ⑭ 偏見がなくなる:1件
- ⑮ 障がいを知らない人にも興味を持ってもらえる:1件
- ⑯ 障がいを持った子どもが母親の気持ちを理解できる:1件

## (4) 第4段階 障がいの理解の発展

障がいについて学習したことを基に、自ら「障がい理解の絵本」を制作する。又、障がい児をもつ保護者にも絵本制作に参加を依頼する。完成した絵本を、他の学生の前で発表し評価しあうことにより、学習意欲の向上と障がいの理解を深める。

学生が「障がい理解の絵本」を自ら制作する前に紹介し読みきかせた絵本『じゅんじゅん』は、障がい児をもつ保護者と障がい児である当事者が参加して制作したものである。

『じゅんじゅん』は、自閉症の子をもつ保護者が、自分の子どもの不可思議なことばや行動を解き明かしながらじゅんじゅんを紹介し、周りの人々の理解を願う内容で、困った状態の時の対応の方法も提示している。

以下は、絵本『じゅんじゅん』を障がい児〔高機能自閉症、自閉症、知的障がい、AD/HD（注意欠陥/多動性障がい）、ダウン症〕を育てている保護者8名に読んでもらった後の質問紙の回答である。障がい児をもつ保護者と障がい児である当事者らが「絵本」をどのように受けとめるかは、配慮しなければならない事柄である。

#### 障がい児をもつ保護者の質問紙の回答

- ①感想
  - ・大変読みやすい、わかりやすい、興味をひく
  - ・じゅんじゅんのがわかったこと。
  - ・難しく描かれていないことがよかった。
  - ・じゅんじゅんのがよく伝わる本だと思う。知らない人が読んだら、じゅんじゅんのことをまるで会ったことがあるように理解できると思う。
  - ・じゅんじゅんのが苦手なもの、好きなものがはっきり分かる。
- ②最も良かった点
  - ・言葉も簡潔でじゅんじゅん君のことを理解できそう。
  - ・人から見て不思議なことを、なぜするか理由が書いてあるところ。
  - ・じゅんじゅんといると楽しくなるという母親の思いが伝わる。それが、母親の一番伝えたい内容だと思った。
  - ・苦手な音がある点がわが子と同じで共感した。
- ③この絵本をどんな人が読むとどんな影響があるか
  - ・小学校で子どもに授業でやればよい。
  - ・普通級にいるようなお友達に読んでもらおうと、より仲良くなれると思う。
  - ・大人も子どもも読むと、自閉症のこと（子のこと）がよくわかると思う。
  - ・学校の先生が読むと自閉症のことが理解できる。

学生が「絵本」制作にかかる前に、いくつかの配慮事項と「絵本」の評価項目の提示が必要である。実際にできあがった「絵本」の発表会で互いに評価をしながら、「絵本」制作の配慮事項を確認しあう必要がある。

#### ・「絵本」制作の配慮事項

- i 障がい児をもつ保護者と障がい児である当事者らがどのように受けとめるかは、非常に重要で、絵本制作にあたって当事者らへの慎重な態度が必要なこと。
- ii 「障がい」についての情報はやさしく説明する必要はあるが、あくまで正しい内容でなくてはならないこと。

以上の点を考慮させて、学生に自主的なグループを作らせ、実際に色々な障がいについての「絵本」を制作させた。それらを他の学生の前で発表させ、次のような観点で評価させた。「絵本」の評価項目：①絵本の内容のまとまりと分かりやすさ、②文章や絵の的確な表現、③豊かなアイデアと工夫、④絵本としての芸術性、⑤完成度と感動の程度、⑥子どもに理解できる分かりやすい表現

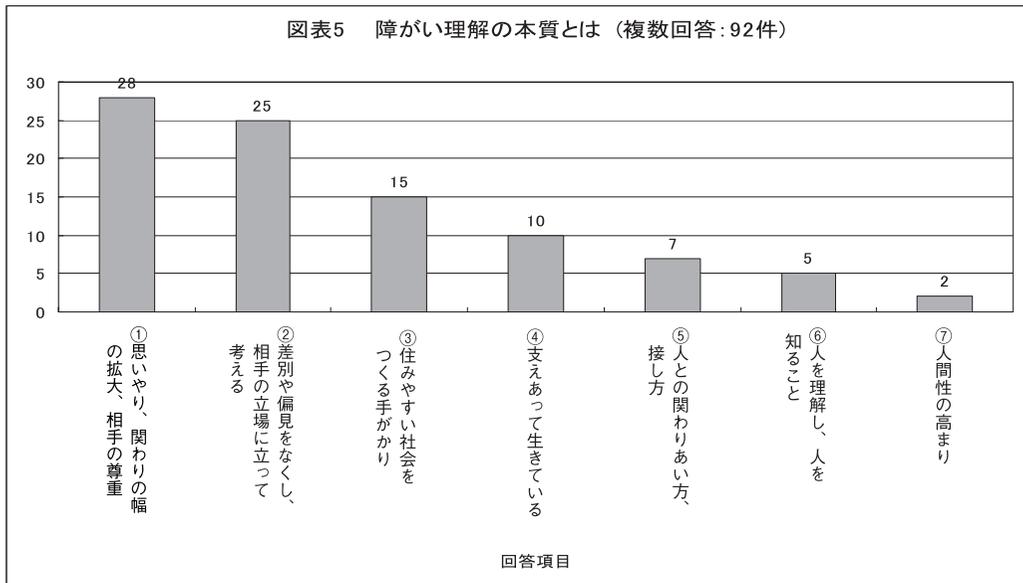
その結果、評価の高かった「絵本」を優秀作品として数点選んだ。

#### (5)第5段階 障がいの理解の実践と本質

第5段階では制作された優秀な「絵本」の読みきかせと効果的な実践方法の検討を行う。また、障がい関連の授業の最終日に、〈質問紙〉「障がいを理解していくことは、根本的にどんなことに通じていると思いますか」をA短期大学保育学科2年82名に、実施した。以下の図は学生の回答（複数回答：92件）をまとめたものである。これによれば、学生は「障がいを理解していくことは、偏見をなくしたり視野を広げたりするばかりではなくて、障がいの有無に関

わらず深い人間観をもち、相手の気持ちを理解し、思いやりをもって接することや、共に支えあって生きているという気持ちで人間関係を作っていくことに通じている」と考えているということが表明されている。換言すれば、これは、図表1に仮説として示した「障がい理解の基本概念(平林, 2007)」の障がい理解の土台となる第1段階の「障がいの有無に関わらず存在を肯定し、存在を尊重し、存在に感謝する心を理解する」という本質に回帰してきたと考えられる。この結果は、図表1「絵本」による障がい理解の基本概念(平林, 2007)の仮説の⑤の段階まで進むと再び、①の段階に回帰したことを表している。なお、この循環を繰り返すことにより、基本となる人間の理解が一層進化し、広範なものになっていくものと考えている。

「障がいを理解していくことは、根本的にどんなことに通じていると思いますか」の回答



図表5「障がい理解の本質とは」の回答項目の意味は下記のように考えられる。

- ① 人に対する思いやりが増えたり、関わりの幅が広がったり、相手を尊重する気持ちが培われること。:「存在の尊重、存在の肯定」
- ② 差別や偏見をなくして、相手の立場にたって考え理解しようとする。:「同じヒトとしての存在の肯定、尊重」
- ③ 社会への関心の高まりと、住みやすい社会をつくる手がかり:「視野の広がり、バリアフリー」
- ④ お互いに分かり合い、支えあって生きているということ。:「共生、存在の尊重」
- ⑤ 人との関わり合い方、接し方に通じている。:「人間関係の理解」
- ⑥ 人を理解し、人を知ること。:「人間への関心、理解」
- ⑦ 人間性の高まり:「人間の深い理解」

## 7. 「障がい理解」の実践教育についての考察

人間の精神的な成長は、「外部からの刺激に対して反応する」ということを何度も繰り返しフィー

ドバックさせることにより、適切な対応を学習していくことである。すなわち、自分以外の人との関係の中で成長していくのである。この自分以外の人、言い換えれば、自分とは異なった人との関係をいかに作っていくかということである。そのためには、自分以外の人（目の前の人、周りの人）がどんな人なのかをよく理解している必要がある。その理解があってはじめてスムーズな関係性が成り立つのである。

障がいのある人はこの自分と異なっている程度が、比較的他の人と比べて大きく、客観的にもその違いがあるということであって、自分以外の人という点では全く同じである。

そのように考えると、障がい理解していくことは、人間を理解することの一つであり、他の人の理解や自分自身の理解を助けるという精神的な成長につながっていくことになると思われる。

子どもの成長段階で、障がいをもつ子どもと接する機会のある環境においては、その理解や対応が自然にできていく場合もある。しかし、実際に園児や幼児教育者から見聞きしたことがあるが、「〇〇組の子はバカな子がいるところだよ」、「〇〇症の子は赤い鼻をして、鼻水をたらしているよ」といった誤解や偏見を持つ場合がある。このような誤解や偏見を正しい「心のバリアフリー」に繋げていくためには、早い段階から障がいに対する正しい知識や考え方、対応の仕方を分かりやすい方法で身に付けさせることが大切であると考え、「絵本」による方法を実践してきた。学生が一連の学びと障がい理解の「絵本」を制作したことにより、「障がい」に対する強い関心と深い理解はもちろんのこと、人間の理解にも役立ったように思われる。

今後、教材の整備と授業方法の向上を図り、「絵本」のより効果的な提示方法などについて一層検討を重ねたい。さらに「絵本」の改良はもちろん、他の障がいについての絵本制作や探求を続けていきたいと考えている。

#### 引用文献

- 1 平林あゆ子（2007）健全児の保護者へ説明をする場合の配慮と工夫．七木田敦（編）障害児保育．保育出版社．170
- 2 Donaldson, Joy(1980) Changing Attitudes Toward Handicapped Persons :A Review and Analysis of Research, Exceptional Children Vol.46, No7, pp9-14.
- 3 山本哲也・桐原宏行・徳田克己(1997) 絵本の読み聞かせによる障害理解教育．日本保育学会大会発表論文抄録(50), 1044-1045
- 4 徳田克己（2005）障害理解．誠信書房．2-3
- 5 前掲書．8-9
- 6 Max Lucado You are special. Good News Publishers Illinois,1998. (ホーバード・豊子訳．たいせつなきみ．東京、いのちのことば社 フォレスト ブックス, 1998, 5-31).
- 7 平林あゆ子監修（2007）平林あゆ子 文 境珠里 絵．たいせつなあなたへ．三恵社．1-14